

## ハイデルベルク信仰問答講解説教30「主の食卓に招かれる者」(2012年3月25日 礼拝説教)

## 【聖書箇所】

主は言われる。「今こそ、心からわたしに立ち帰れ／断食し、泣き悲しんで。衣を裂くのではなく／お前たちの心を引き裂け。」あなたたちの神、主に立ち帰れ。主は恵みに満ち、憐れみ深く／忍耐強く、慈しみに富み／くだした災いを悔いられるからだ。あるいは、主が思い直され／その後祝福を残し／あなたたちの神、主にささげる穀物とぶどう酒を／残してくださるかもしれない。(ヨエル2:12-14)

わたしは何を言おうとしているのか。偶像に供えられた肉が何か意味を持つということでしょうか。それとも、偶像が何か意味を持つということでしょうか。いや、わたしが言おうとしているのは、偶像に献げる供え物は、神ではなく悪霊に献げている、という点なのです。わたしは、あなたがたに悪霊の仲間になってほしくありません。主の杯と悪霊の杯の両方を飲むことはできないし、主の食卓と悪霊の食卓の両方に着くことはできません。それとも、主にねたみを起こさせるつもりなのですか。わたしたちは、主より強い者でしょうか。(1コリント10:19-22)

## 【説教】

今日の信仰問答を読みまして、皆さんはどういう感想をお持ちでしょうか。問80では「呪われるべき偶像礼拝」とカトリック教会のミサを厳しく批判しています。問82では悔い改めない者たち、不信仰と背反を示している者たちを「鍵の務めによって閉め出す」ということが言われます。ちょっと厳しいのではないかと。排他的ではないか。教会はもっと赦すべきところではないか。寛容であるべきではないか。そういう声も聞こえてきそうです。しかし逆に今日あまりにも教会は寛容すぎるところがあると思います。またそれは寛容という言葉で表現するのは適当ではないかもしれません。それはむしろ無秩序であります。

何を言っても、何をしても赦されるところが教会だという空気があります。あるいは何かを言えば教会に来なくなる。つまづきを与えるのではないかとという恐れを教会は持ちます。だから何も言わない、言えない。そういう臆病がある。ゆえに教会の中に甘えが出てきます。口に慎みがなく、言いたい放題があり、様々な言い訳をつけては自分を正当化し、それを指摘すると愛がないとか、冷たいと逆に教会を批判する。またそれは日本基督教団の現状をそのまま表しています。イエス・キリストの神性を否定する明らかに異端的なものがあります。教規違反があります。倫理的な問題が起こります。しかしそれをも正せない。戒規を適用できない。しかし本来教会はこの厳しさを持っている。「神は無秩序の神ではない」(1コリント14:33)とあります。教会は秩序を持っているのです。それゆえに秩序を乱すことがあれば教会はそれに厳しく対処していかなくてはなりません。教会はキリストの体なのです。その体に相応しく教会を整えていく責任があります。

キリスト教の教理もそうです。本来教会は厳しいのです。厳密なのです。それは人間の救いに関する事柄だからです。厳密になって当然なのです。教理は多くの論争の歴史を経て今日に至っています。何の自己批判もなく教理が成立しているのではありません。絶えず論争し、その結果分裂し、多くの教派教団が生まれます。教理に厳密であることは牧師が最も神経をつかうところです。説教においてはもちろん、すべての事柄について信仰の筋を通すこと。こういう緊張が必要ではないでしょうか。

聖餐を巡る論争も聖餐の教理を厳密にする過程で起こります。この問80では、ローマカトリック教会への厳しい批判がなされています。「教皇のミサ」というのは、カトリック教会における聖餐のことです。それとわたしたちの教会の守る聖餐が比較されています。そしてついに、カトリック教会のミサは呪われるべき偶像礼拝に他ならないとしています。ある別の翻訳では「忌々しい迷信」と結んでいます。まったく遠慮がありません。

これをカトリック教会の人たちが聞いたら間違いなく憤慨するでしょう。今日、このような厳しい批判は、エキュメニカル、信仰一致運動の盛んな時代には相応しくないという声もあって、ハイデルベルク信仰問答を受け入れている同じ改革派の教会でもこの問80は敬遠されているところもあるようです。

しかし一方で、カトリック教会では宗教改革以後、対抗宗教改革(カウンターリフォーメーション)の運動が起こり、プロテスタント教会への激しい抵抗を展開します。そういう中でカトリック教会ではプロテスタント教会の洗礼を認めず、従って、本来カトリック教会のミサにプロテスタントの信徒が与えることはできません。黙っていれば受けることはできるでしょうが、自分がプロテスタントであることを申告すれば「ご遠慮ください」ということとなります。

この『ハイデルベルク信仰問答』のテキストをお持ちの方は、この問80に注が付してあることに気付くでしょう。そこにはこう記されています。「この問80は、初版の問答には無かったもので、第二版に現れ、第三版ではさらに括弧内のものは付加された」。最初はこの問80は無かったのです。『ハイデルベルク信仰問答』は以前も触れましたが「慰め」を特徴としています。当時、宗教改革の論争の時代に極めて平和的な性格をもって、この信仰問答は作られました。しかし先ほども触れましたが対抗宗教改革の動きもあり、その中で調停的な意味合いもあってトリエント公会議が開催されます。これは1545年から1563年まで実に18年間にも及ぶ会議でしたが、プロテスタントが審議拒否の中で、一方的にカトリック側が1562年にミサに関する教義、化体説の教義をそのまま承認、可決します。ハイデルベルク信仰問答の初版が出されたのが1563年ですから、初版が出された頃はまだその決議が反映されていなかったのでしょうか。しかしその後、決議を受けて、第二版でこの問80を加え、更には第三版で激しい文言も付されるような改訂がなされていきました。プロテスタント側の激しい怒りが伝わってくるようです。ちなみにこのトリエント公会議での可決は今日においても何らの変更もありません。1962-65年の第二バチカン公会議でもこのミサの教義はそのまま確認されています。

なぜ、怒るのでしょう。なぜここまで熱くなるのか分かりませんか。前回の説教でカトリック教会の化体説の話をしました。それは司祭が制定の祈りをささげた瞬間にパンと杯がキリストの体と血に変化するということです。この点をプロテスタント教会でははっきりと否定しました。問78では「パンとぶどう酒がキリストの体と血そのものになるのですか。いいえ」と答えます。それはあくまでもしるし、保証にすぎないとします。けれども信仰をもって、聖餐に与る時に、聖霊が働いて、わた

私たちは天のキリストの体と血にあずかる。問76では「聖霊によって、その祝福された御体といよいよ一つにされていく」と言います。そのような形でわたしたちはキリストの体に与るのです。

つまりカトリックでは、そのパンと杯こそがキリストの体そのものであって、ミサそのものに救いの効力があるとすることに対して、プロテスタントは、パンと杯は天のキリストの体を指し示していて、そのパンと杯に与ることで、信徒は天のキリストの体に結ばれていることを確かめ、よって自らがキリストの救いに与っていることを実感するというのです。つまりプロテスタントが強調しているのは、救いの効力は、あくまでもキリストにあって、ミサではないということなのです。

信仰問答では「ただ一度十字架上で成就して下さったその唯一の犠牲によって、わたしたちが自分のすべての罪の完全な赦しをいただいている」とあります。あくまでも聖餐が指し示しているのは、キリストの十字架の出来事であって、そのただ一度の十字架の出来事が完全な救いであること。その十字架の出来事こそ人類にとって唯一の完全な永遠の救いである。それは今日にも効力が及ぶのです。それがプロテスタントの立場。

しかし、カトリックのミサは、パンと杯がキリストの体と血になるというのです。つまりミサの度に、キリストは繰り返し肉を裂き、血を流して犠牲となり続けているということ。それはあの二千年前の十字架の犠牲を軽んじ不完全なものとするのではないのでしょうか。わたしたちは問われるのです。わたしたちを救う力があるのはあの十字架のキリストなのか、司祭の行うミサなのか。ミサに力があるとすれば、それは間違った仕方です。神さまの救いを信じていることになり。教会の礼拝が人を救うものではありません。キリストの十字架に救いがあるのです。だから信仰問答はきっぱりと言います。「ミサは、根本的には、イエス・キリストの唯一の犠牲と苦難を否定しており、呪われるべき偶像礼拝に他なりません」とキリストではなく、教会の礼拝行為ミサを信じるという偶像礼拝がそこに起こっている。この批判は最もなことだと思えます。

しかしこの偶像礼拝はカトリックだけの問題ではなく、わたしたちもこのような過ちを犯しやすいことをわきまえておかなければなりません。問81を読みましょう。ここではどのような人が聖餐に与るに相応しいかが述べられています。それは自分の罪を嫌悪する。悲しみつつも、キリストの十字架によって、それが赦されていることを信じる者であります。そしてこの地上の生活を続けている間は、まだ完全ではないので、「残る弱さ」とあります。わたしたちはまだまだ弱く罪を重ね続けている。でもそれもキリストの犠牲によって神さまの御前に覆われている。執り成しを受けているということ。だから日々悔い改め、感謝して、少しでも救いに相応しく生きようと求める。そういう人こそ聖餐に相応しい。

逆に悔い改めない者、偽善者は相応しくない。それはそうだと思うかもしれない。しかしわたしたちはこの悔い改めない者、偽善者になりやすいのです。つまり自分の罪を認めない、自分は正しい、相応しいと思っている人こそ、実は聖餐に相応しくない。相応しくないと思っている人が相応しく、相応しいと思っている人が相応しくない。そういう逆転がここにあります。

こういうことがあります。これは実際にあった話ですが、聖餐の時にある教会員が聖餐に与らなかつた。受けるのを拒否したのです。礼拝の後で、そのことに気付いていた牧師がその人を呼び止めて尋ねた。どうして聖餐に与らなかつたのか。するとその人はこう答えた。「わたしは先週過ちを犯した。信仰者として間違った生き方をした。だから聖餐に相応しくないと考えたから与らなかつた」と。ところがそれを聞いた牧師はその教会員を厳しく叱った。「あなたは傲慢だ。あなたの生き方が聖餐に与る相応しさを作るとでも考えているのか。聖餐に与る相応しさを作ったのはあなたではない。キリストだ。聖餐に与らないことはそのキリストの恵みを、十字架の犠牲を否定することだ」

わたしたちはとかく自分の生き方、自分の倫理的生活が、その相応しさを作ると考える。立派に生活してきたなら聖餐に与る相応しさを持つと勘違いするのです。それはまさに悔い改めない者、偽善者です。それはキリストの十字架の犠牲を無駄にすることで。それよりも自分の生き方により頼むことでしよう。それもまたミサと同じように偶像礼拝なのです。

この問81を読みながら思い起こす御言葉は、ルカ福音書第18章9節以下のところです。自分は正しい、相応しいと考えている限りは、その人の中にキリストへの感謝はないでしょう。正しい行いをする自分しかありません。でも目を天に上げられず、胸を打ちながら「憐れんでください」としか言えない者にとつて、キリストのあがないはどれだけ救いになるのでしょうか。感謝になるでしょう。その人にとって、キリストこそが唯一の救いなのです。それが聖餐に与る相応しさなのです。

本日のヨエル書の箇所を読みましょう。聖餐の前に自己を吟味する。それは悔い改めに他なりません。自分が相応しい生活をしてきたかではない。自分は相応しくないことを徹底して悔いすること。そして自分ではなく、自分を離れて、主に立ち返ること。そうすればそこに主の食卓の恵み、キリストの命の養いが見えてくるでしょう。シレジウスという古代教会の人は「この世で聖なる悲しみに満ちてタペのパンを食べる者には、神における永遠の喜びの晩餐が待っている」と言いました。御前に悔い改めることこそが聖餐の相応しさです。

今日の間答で押さえておきたいことは、この聖餐の主催は誰かということ。この食卓の主人は誰か。キリストが中心にならなくては、それは主の食卓になりません。今日読みました御言葉でも「主の食卓と悪霊の食卓の両方に着くことはできません」(Iコリント10:21)とあります。キリストがいない食卓はすべて悪霊の食卓になります。偶像礼拝です。司祭の行うミサに救いの力があると考えるカトリックのミサも、自分の生き方が聖餐に与る相応しさを作ると考えることも、共にキリストがおられません。聖餐の主催は司祭でしょうか、立派に生きてきたわたしでしょうか。わたしたちのためにただ一度完全なあがないを成して下さった十字架のキリストがそこにおられなければ、それは主の食卓にはならない。そこはどんなに厳密にしてもしすぎることはないと思います。そういう問いがこの問答の背景にあります。わたしたちは十字架の主の食卓に招かれていることを決して忘れてはなりません。祈りをささげます